



ぶどうのささやき

地域経済の活性化を目指し、社会貢献をしています。

40号

2026年
1月15日発行



いたいたご縁、ご恩を大切に・・・



あけましておめでとうございます。

私は、現在、(地独) 神奈川県立産業技術総合研究所 (KISTEC) や横浜国立大学といった公的機関を中心に、主に産学官の連携に関するコーディネーター活動に従事しています。横須賀の皆様との出会いは、平成29年度に(公財) 横須賀市産業振興財団(当時) の産学連携事業に KISTEC 職員(当時) として、月1回の横須賀地域の企業訪問や「御用聞き」などの業務に同行させていただいたのが始まりです。右も左もわからない状況のなか、財団や行政の方々との同行企業訪問を通じて、遅ればせながら「横須賀におけるものづくりの現場」を学ばせていただきました。

令和3年度をもって KISTEC 職員の身分を離れることとなりましたが、現在もさまざまな支援機関で活動する立場となり、年間延べ約150社以上の企業に訪問する中で、横須賀地域の企業様へは市、商工会議所などの皆様と連携し、今でも月に1度の企業訪問を実施しています。その場で、社長様方が語ってくださる「ここに至るまでの長～い道のり」は、何ものにも代え難い貴重な学びの場です。とくに、私が大好きなのは、社長様の経験から導き出された「重みのある言葉」、「たどり着いた言葉」、「ご縁と感謝の言葉」などです。これらの貴重な“お言葉”は、私の産学官の連携を通じた企業支援活動の根幹となっているのは言うまでもありません。

横須賀の企業様は、「自分たちにしかできないもの」を持っていることを実感しています。お土地柄から、船舶、鉄道、自動車など、古くからある産業を守り抜いてきた結果、「横須賀に行けばなんとかなる!」、「やっぱり横須賀じゃないと・・・」と全国から頼りにされる産業分野が数多く存在しています。

業界転換、事業承継、生産性向上などといった大き

神奈川県立
産業技術総合研究所
連携支援コーディネーター

横浜国立大学
産学官連携コーディネーター

伊東 圭昌



な課題を、社長様方は、さも当たり前のように乗り越えてきたとおっしゃります。ただ、困っている側から見たら、とても心強さを感じます。伝統を守り続ける心強さをもっている地域だと断言できます。

訪問時、KISTEC / 横浜国大などの支援活動について紹介する機会もあり、訪問後しばらく経ってから「・・・が割れちゃったんだけど、原因とか調べられるかなあ～?」、「・・・というテーマで大学の先生の意見を聞きたいんだけどさあ～！」という相談をいただくことがあります。覚えていただいて連絡をいただき、感謝でいっぱいです！ また、展示会、会合などの出会いを契機に近況などを教えていただけること、支援冥利に尽きます。支援活動を継続したいと考えています。

昨年11月には貴法人を KISTEC にお迎えして、最新の技術動向に関する紹介や所内見学会を実施させていただきました。本年も、皆様とのご縁を大切に、直接現場で皆様の強みをお伺いさせていただき、何らかの支援という形でお返しできるよう横須賀市内企業への訪問をさせていただきます。お困りの際には、ご一報ください。お役に立てるように、お話を伺いに参りたいと思います。

最後に、地域経済活性化に精力的に取り組まれている貴法人の皆様にとって、本年が素敵なお年になりますことを心より祈念いたします。

クラスターとは・・・

クラスターとは、ぶどうの房や羊の群れを意味します。米国の経済学者マイケル・ポーターが著書『経済戦略』の中で異業種間のネットワークを構成している状況を意味するものとして『産業クラスター』という言葉を使っています。私たちは地域経済活性化への貢献を目指して、2003年8月に産業クラスター研究会を設立しました。





理事長挨拶

年頭のご挨拶

平素より当会の活動に対し多大なるご支援、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

当会の活動も20年を超え、その間、地域の中小企業の皆様が抱える多様な課題の解決、市民の皆様の日常的な疑問の解消、さらには子供たちの自然とのふれあい活動等を通じ、微力ながらお役に立てていれば幸いです。

当会は、産官学の各分野で活躍されたOB・OG諸氏が、それぞれのスキルやキャリアを生かし中小企業の生産性向上、新規事業の立ち上げ、事業承継といった課題解決や市民の皆様のちょっとした疑問の解決に寄り添いながら歩んでまいりましたが、中小企業を取り巻く環境は時代と共に変化し、近年は主に急速に進むデジタル技術の活用が、生き残りの必須条件として強調されるようになっています。

しかしながら高度成長期をアナログ感覚の心意気で歩んできた当会メンバーにとって、日進月歩のデジタル技術は自らも勉強をしながら研究する対象でもあり、中小企業にとってのDX化とは何か、どのように成果につなげるのかを皆様と共に考え、理解を深めて行かねばならないと思っています。

当会では情報セキュリティ、及びDX/デジタルAI研究グループの二グループが定期的に勉強会やセミナーを開催しておりWeb会議も含め、皆様のご参加をお待ちしています。

昨年11月下旬に神奈川県立産業技術総合研究所を視察し、併せて中小企業向け生成AI活用促進事業の説明を受けました。

この事業は県がAI人材育成セミナーの開催や企業に専門家



理事長 富野 養二郎



を派遣して導入に関わる現状把握や問題の見える化、解決策の提示を始めとして実現性の検討や計画の策定までのコンサルティング、最終的に開発テーマが定まった企業には補助金による開発支援までを行うきめ細かなプログラムを備えています。

昨年度この制度を利用した企業は県央部の中小企業が多く、残念ながら横須賀、三浦半島地区からは当制度を活用した企業はなかったということでした。

当支援策に関心のある企業様はぜひお声かけをお願いします。

年頭のご挨拶からぬ実務的な話になってしまい恐縮ですが、現下の政治、経済情勢は決して安定しているとはいえない。国の中小企業に対する貸上げ支援策も補助金という一時的なカンフル剤でしかないと思え、それよりも先に大企業には旧来の商習慣を見直し、サプライチェーン全体に持続的な安定をもたらす取り組みが求められると考えます。

最後になりますが本年も変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

▽前回、この場で拙文を寄稿させていただいたのは六年前、29号のことでした。そこでは半年後に控えた東京オリンピックでのマラソン競技に期待する内容を書きましたが、時あたかもコロナ禍に見舞われ開催は翌年に延期、世は自肃モードへと一変しました。いま2026年を迎えるに当たり、さまざまな計画や予測、見通しなどが飛び交う中、夢や希望を描くことはもちろん大いに喜ばしいことではあります。それらの中でも誰ひとり予想だにしなかった方向へと環境全体が大きく展開することも常に起こり得るということを、心に留め置きたいと感じ入る新春です。

▽2月8日はMさんの命日です。Mさんは、横浜市〇社の創業者であり当会設立の時期から法人会員として会の発展にご尽力されました。その情熱的な活動や長年の経験に裏打ちされたユニークなご発言などは会員間でも厚い信頼を集め、とくに近江商人の売り手よし・買い手よし・世間よしになぞらえ、そこに「自然よし」を加えた「横浜ビジネス四方よし」(商標登録第6372767号)を掲げて若手経営者の育成に最後まで奔走されていたお姿が鮮明に脳裏に蘇ります。まだまだこれから活動も期待される中、89歳でご逝去されたMさんのご遺志は5年を経ても語り継がれています。

▽クリスマスローズはもともと原産のヨーロッパでクリスマス前後に白い花をつけることでそう呼ばれていたのだそうです。「ローズ」とはいつてもバラではなくキンポウゲ科の植物で、日本では普通2月～3月頃に花を咲かせます。うつ向き加減に咲く花は地味な印象かもしませんが、冬の寒さに耐えて春を告げる花として多くの愛好家に親しまれています。花言葉は「私を忘れないで」「慰め」「いたわり」「追憶」。厳しい環境の中で根を張り着実に花を咲かせ、強く生きる希望や癒しを表現する。この花は



クリスマスローズ



【歳時記】新春万感



活動紹介

大阪・関西万博見学記

産業クラスター研究会の年間計画の一環として、9月10日から翌日にかけて一泊二日で大阪・関西万博を見学した。猛暑の残るなか、広大な会場へ向かう途中からすでに万博のスケールを実感した。駐車場から西ゲートまでも相当な距離があり、会場内多くの来場者で賑わっていたため、入場可能なパビリオンを探しながらひたすら歩くことになった。人気の高いアメリカ館、イタリア館、フランス館などは入場パスの取得が難しく、待機時間も長いため断念したが、それだけ万博への期待と注目度の高さを感じることができた。

一方で、アフリカ諸国や複数国が共同出展するコモンズ館は比較的入りやすく、各国の自然や産業を工夫して紹介する展示が並び、万博の持つ多様性と魅力がよく伝わってきた。こうした国際的な広がりに触れたことで、世界の国々がそれぞれの強みや課題を共有しながら未来を描いている様子を実感できた。

今回の訪問で最も印象に残ったのは、一周2キロにもおよぶ巨大な木製の大屋根リングである。長いエスカレーターを上って高所に出ると、会場全体を見下ろせる壮大な

個人会員 堀込 孝繁、安藤 誠四郎、伊澤 俊夫



景観が広がり、万博に来ているという実感が一気に高まった。広大な敷地に点在するパビリオン、人々の流れ、活気ある雰囲気が一望でき、万博のスケールをあらためて理解する瞬間であった。

また、幸いにも日本館のチケットを手に入れることができ、環境サイクルをテーマとした展示を見学した。素材からモノへ、廃棄物から水へ、そして水から再び素材へと循環する仕組みが、藻類や微生物の働きを交えて紹介されており、持続可能な未来を考えるうえで多くの示唆を受けた。南極で発見された「火星の石」に実際に触れられる展示も非常に印象深かった。

会場全体には多様なパビリオンが展開され、訪れた人々がそれぞれのスタイルで楽しんでいた。平日のため修学旅行生や女性のグループも目立ち、日本人だけでなく多くの外国人来場者も見受けられ、国際的な交流の場としての万博の雰囲気が色濃く感じられた。過去の大阪万博や愛知万博では、技術革新や未来都市など「夢の世界」を想像させる展示が中心だったが、今回は環境問題やSDGsといった地球規模の課題に向き合う内容が多く、時代の変化とともに自分自身の関心の変化にも気づかれる訪問となった。

活動紹介

KISTEC 見学

本年度の「公共支援」グループの現場見学事業として、11月21日（金）に海老名市にある「地方独立行政法人神奈川県立産業技術総合研究所（KISTEC：Kanagawa Institute of Industrial Science and Technology）の視察見学を実施した。

参加者は11人で、はじめに会議室で施設の概要と事業内容が紹介された。技術面での依頼試験に対応する県の試験研究機関というイメージを持っていたが、現在のKISTECの基本理念は県内中小企業のイノベーション創出を支援す



るため、新たな成長産業の創出を目指す研究開発、技術課題の解決や品質の向上に資する技術支援、新製品やサービスの創出に貢献する事業化

支援、イノベーション人材の育成、ハブ機能の強化を担う連携交流を5本柱として種々の事業を行っている。説明の後、2グループに分かれて製品・部品・原材料等の開発・改良に必要な分析・測定・加工等の各種依頼試験に対応する精密測定室、材料評価実験室、電波暗室、促進劣化試験室、

個人会員：堀込 孝繁



非破壊検査実験室を見学し、担当の技術職員に具体的な試験内容について質疑を重ねた。見学後会議室に戻り、特に最近注目されている生成AI活用促進事業の専門家派遣とコンサルティングについて支援内容の詳細を伺った。本紙の理事長挨拶でも触れられているように、本事業については横須賀の中小企業からの昨年度の利用はなく、海老名までの遠さという地の利のハンデがあるとはいえ、中小企業の潜在的なニーズを掘り起こしてKISTECに橋渡しをする役割を当研究会が果たす必要性を痛感した。

視察見学終了後、昼食をはさんで午後はKISTEC主催による研究成果発表交流会に参加した。3本のプログラムが別々の会場で同時に進行する盛りだくさんの内容で、このうち講堂で開催された「イノベーション創出！～技術×支援でつながるミートアップ～」を聴講した。県、関東経済産業局、大学、大企業、ベンチャー企業などそれぞれの立場から産学官連携の具体事例が次々に紹介され、新たな開発課題に取り組む領域や手法の多様さと挑戦者の熱意に触れることができた。

今回の視察と研究成果発表交流会への案内を導いていたいた伊東圭昌氏には本紙巻頭言も執筆していただき、ここで感謝申し上げたい。

歴史散歩

パリ万博と二人の幕臣

個人会員 新井 全勝

慶応3年（1867年）、明治改元直前に開催されたパリ万博に、日本は初参加した。幕府はナポレオン三世の招待を受け、將軍の名代として徳川昭武（御三卿・清水家当主）を派遣し、公式代表として出展した。幕府のほか、薩摩藩・佐賀藩もそれぞれ独立した名義で出展した。とくに薩摩藩は「薩摩琉球国太守政府」として参加し、琉球王国の使節を装う形で国際舞台に登場した。幕府はこの事実を現地フランスで初めて知り、外交上の重大問題として抗議を行った。

幕府の展示には浮世絵が含まれ、これが西欧の芸術家たちに衝撃を与え、「ジャポニズム」と呼ばれる日本ブームを巻き起こした。印象派誕生の契機となったともいわれる。

昭武の渡仏準備中、渋沢栄一は会計・庶務係として随行が決まり、横浜に滞在していた。慶応2年12月のある日、出品責任者である、勘定奉行・小栗上野介が昭武に挨拶に訪れ、渋沢とも言葉を交わす。

かつて攘夷論者として討幕を企てた渋沢に対し、小栗は皮肉を込めて「足下は五年も後のことを見越す柄でもあるまい」と語りかけた。渋沢は「それは昔の話でございます」と応じ、何食わぬ顔でかわした。昭武は万博後に留学する予定であり、渋沢はそれにも随行することになっており、金銭面の依頼をしていたのである。

その後、小栗は渋沢の補佐を喜び、「足下の如き為すあるの士が御補佐申上げることは重畠至極」と称えたうえで、「会計のことについて、五年は愚か三年でも二年でも将来のこととは分らぬが、苟しくも不肖小栗が職に在る間は決して心配はかけぬから安心して行くがよい」と言い添えて別れた。

パリ万博の記憶が欧州に残るほど一年後の慶応4年2月28日、小栗は静かに上野国群馬郡権田村へと向かった。そして同年閏4月、非業の死を遂げる。同年5月、昭武や渋沢に帰国命令が下りる。

上記は、そのときの会話を、昭和5年に飛鳥山の私邸で渋沢が懐古して、元秘書・白石喜太郎に語ったものである（『白石喜太郎憶記』）。

渋沢の随行もまた不思議な成り行きがある。昭武の随行員が攘夷派の水戸藩士であったため、騒動を懸念した人が慶喜に相談し、渋沢が追加されたという。かつて討幕を志した青年が、幕府の代表団の一員として欧州に渡り、やがて「資本主義の父」と呼ばれる道を歩むことになる。歴史の転回点には、こうした偶然と人の縁が潜んでいた。

渋沢と小栗の会話部分の詳細は、当会のWebサイト「小栗上野介秘話」を参照してください。本稿は、Copilotの助力を得て推敲を重ねたものである。

2025年度下期は次に記載の通り企業支援活動並びに公益支援活動に取組んでいます。

1. 8月25日 臨時理事会（2025年度第2回）を開催。

4月にご逝去された濱田理事の後任として横浜製機（株）社長 古川史郎氏を選任しました。

2. 有志にて9月10日一泊二日で大阪・関西万博見学会を行いました。詳細は本紙活動報告をご覧ください。

3. 観音崎自然博物館のご協力を得て、10月19日 同博物館前において横須賀市補助金事業「子供ものづくり教室」を開催しました。

天候が不順で来訪者は例年のように多数とはいきませんでした。

4. 10月23日 企業向け「第10回情報セキュリティセミナー」をオンラインにて開催し企業より7社が参加しました。“ランサムウエアの実態と対策”、“フィッシング・メールの実態と対策”を報告、説明し時機を得た開催となりました。

5. 11月21日 海老名にある地方独立行政法人 神奈川県立産業技術総合研究所（KISTEC）の見学会を開催しました。会員及び友人が参加。詳細は本誌活動報告をご覧ください。

6. 12月19日 2025年度 第3回理事会を開催。2025年度上期活動実績と通期見通しの報告があり、今後の活動について意見交換を行いました。

（事務局 佐々木 興吉）

事務局からのお知らせ

昨年は梅雨らしさを感じる間もなく、各地で連日の35℃超えの猛暑が続きました。9月、10月になっても真夏日が收まらず、日本の気候は四季の「春夏秋冬」から、もはや「夏と冬の二季」に変化してきているのではないかとさえ云われています。

こうした気候の変化は、野生動物にも影響を及ぼしています。東北・北海道では、11月、12月になっても冬眠に入らないクマが市街地へ出没し、人的被害は2000年代で最悪の数値となりました。昨年は死者13名、負傷者217名に達しています。猛暑による山の食料、特にどんぐりの不作が背景にあり、自然環境の変化により人間とクマの生活圏の境界が曖昧になり、事故が増加しているのです。

これらの現象は、2015年に国連本部で192カ国が全会一致で採択した「2030アジェンダ（持続可能な開発のための

行動計画）」、いわゆるSDGsの重要性そのものを示しています。

私たち人類の文明が用いるエネルギー量は、地球の自己調整能力を超えて始めていると云われています。地球には本来、炭素循環（水・森林・海洋によるCO₂吸収）、水循環、窒素・リンの生物地球化学的循環、さらに気候を安定させる放射平衡など、さまざまな「自己調整（homeostasis）」の仕組みが備わっています。しかし現在、その能力を上回るスピードで人間活動が影響を与えつつあるのです。

日々、身近な仕事や生活に追われる中では、自分の立ち位置を見失うこともあります。しかし、ときには地球規模で物事を俯瞰する視点も大切ではないでしょうか。私たち人類は、一人の生命を維持するのに必要なエネルギー（約2,000kcal/日）の数百倍を消費し、実に数百～千倍ものエネルギーを社会全体として創出していると云われています。（俊）

発行：特定非営利活動法人 産業クラスター研究会

〒239-0847 横須賀市光の丘8番3号 YRPベンチャー棟209号

Tel & Fax: 046-847-6355 E-mail: y-cluster@cluster.jp

横浜事務所 〒236-0055 横浜市金沢区片吹69番26号

連絡先: 046-847-6355

E-mail: y-cluster@cluster.jp

発行人：富野 養二郎



<https://www.cluster.jp>